

第3回 相模原事件を考える シンポジウム 報告

重度障がいのある人と共に
地域で生きていくという事



2019年7月20日
中津市教育福祉センター
多目的ホール

主催 『相模原事件を考えるシンポジウム』 県北実行委員会

目 次

はじめに		・・・	1
開会あいさつ	実行委員長 川野陽子	・・・	3
基調報告	廣野俊輔	・・・	4
パネルディスカッション		・・・	9
コーディネーター	徳田靖之		
パネリスト	財津浩子		
	川野陽子		
	宮西君代		
	村田憲一		
助言者	廣野俊輔		
まとめのあいさつ	寄村仁子	・・・	28
ネット配信への感想		・・・	30
参加者アンケートへの回答から		・・・	31
あとがき		・・・	35

はじめに

この冊子は、2019年7月20日に中津市で開かれた「第3回相模原事件を考えるシンポジウム」の記録です。

相模原事件のような悲しい事件を2度と繰り返さないために、そしてこの事件をきっかけに重度障がいのある人たちが地域で一緒に暮らしていくために何が必要なのかを考える場にしようと、県北地域に暮らす障がいのある人たちや支援者、行政の人たちが準備をしてきました。

障がいのある人、家族、支援をしている人、研究者等、それぞれの立場から思いを込めたお話をさせていただきました。

一人でも多くの方に共有していただき、障がいについて知って、地域のあり方を考え、私たち一人ひとりが自分の問題として考えるための一助になればという願いを込めて作成しました。

2019年9月

『相模原事件を考えるシンポジウム』 県北実行委員会

『相模原事件を考えるシンポジウム』

開会

主催者あいさつ

基調報告

パネルディスカッション

- 1 はじめに
- 2 相模原事件をどう受けとめたか
- 3 「いのち」を選別するという考え方をどう受け止めるか
- 4 重度障がいのある人が地域で生きていくために何が必要なのか

まとめ

閉会

主催者あいさつ

実行委員長 川野陽子

みなさん、こんにちは。今日は雨が心配されるなか、「第3回相模原事件を考えるシンポジウム」にこんなに多数の方々にご参加頂き本当にありがとうございます。今回のシンポジウムの実行委員会の代表をさせていただきます川野です。

今から3年前、神奈川県相模原市にある知的障害者施設で、元施設職員により重度障がいのある19名の尊い命が奪われる、衝撃的な事件が起きました。この事件はメディアなどを通じご存じの方もたくさんいらっしゃるかと思いますが、事件発生後は「障害者なんかいなくなればいい」という加害者の言葉に、ネット上では多くの賛同する声があがりました。

この事件は、障がいに対する差別、偏見、優生思想、人が人として生きること、命の大切さなど、社会が抱える様々な問題と、私たちがこれからどうやって向き合い、取り組んでいかなければいけないかを問いかけているのではないのでしょうか。それを受け過去2回、大分市でシンポジウムを開催しました。様々な立場の人から沢山の話を聞き、思いを共有してきましたが、結論、答は出ませんでした。

この事件を風化させないこと、そしてこれから地域の中で重度の障がいがある人が生活して行くには何が大切か。それを障がいのある人もない人も、福祉に関わっている人も、まだ関わってない人も一緒になって考えていきたい、そんな思いで今年の中津で第3回目のシンポジウムを開催することになりました。これまでシンポジウムに関わってこられた方々と、この思いに賛同して一緒になってシンポジウムをつくろうと考えた宇佐、中津の福祉団体や行政の方々を中心として実行委員会を立ちあげ、約半年に渡り準備を重ねてきました。

開催にあたり、中津市、中津市社会福祉協議会、中津市議会の後援をいただき、今日は中津まで来ることが出来ずこのシンポジウムの会場まで来ることが難しい方々にも参加してもらいたいという思いから、インターネット配信にもご協力いただくなど、本当にたくさんの方々のご協力により開催できたことをうれしく思っています。

今日は長時間になりますが、この会場にお越し頂いた皆さんと一緒に「重度障がいのある人と共に地域で生きていく事」、それはどういうことなのかといったことを考えていく時間にしたいと思っています。最後まで、よろしくお願ひします。

相模原事件はどのような事件だったか

大分大学 廣野俊輔

今日お話しすることの一つは、相模原事件を振り返ってどのような事件であったかを共有したいと思います。覚えている方も、忘れた方もいらっしゃると思います。二つ目に、植松被告は自分の考え方は変わっていないと話しています。この考え方についてどんなことを言えるか、ということを考えていきたいと思います。三つ目に、今日のもう一つのテーマ「地域で障がいを持つ人が暮らしていく」上でのいろんな課題とか展望についても考えていこうと思います。この事件と、地域で重い障がいを持った人が生きていくことがどうつながっていくのか、というお話を、シンポジウムに向けたきっかけにしていきたいと思っています。

大きな入所施設で起きた事件

まず、津久井やまゆり園とはどういう所なのか。1964年にできたかなり古い施設です。「人里離れた」と説明した資料もあります。1964年は55年前の東京オリンピックの年です。1960年に精神薄弱者福祉法（現在は知的障害者福祉法）ができました。精神薄弱者という言葉は差別という事があって、1999年から知的障害者という言葉に変わりました。この施設ができていて重要な背景があって、当時、児童福祉法という法律で知的障がいがある子どもを18歳まで療育することになっていました。このため、知的障がいの子どもを持つ親は、大人になっても預かってくれる施設をつくって欲しいという願いを述べて知的障害者福祉法をつくってくれと働きかけたわけです。つまり、今に続く「親なきあと」の問題の原点がここにある、この解決策が大きな入所施設とならざるを得なかった時代、その施設の一つがやまゆり園であるということを確認しておく必要があります。

当時の親の会の資料の中にこんな論理が使われていたんです。「うちの子たちはいつまでたっても子どもと同じようなものです。ですから児童福祉法が18歳までというのは知的障がい者に関してはやめてください」。親は施設をつくるという目標があったとはいえ、自分の子どもに対して「うちの子は大人にならない永遠の子どもだ」と言わざるを得なかった、そういう時代です。そういう施設が、ずっと時間が流れて2016年に大きな被害に遭いました。

7月26日のことですが、午前2時頃に押し入った植松被告によって次々と入所している人が切りつけられました。彼は、障がいを持って言葉のやりとりが難しい、彼

から見てそう言えるということですが、そういう人たちを重点的に狙ったということが分かっています。施設の職員も縛られたり、暴行を受けるという状況のなかで、そのことに気づいた職員は「この人はしゃべれるのか」と聞かれて、発話のない方も「しゃべれる」と言って守ったというエピソードもあります。結果として19名の方が亡くなって27名の方がけがをしたということです。当時、戦後最悪の事件と言われたのですが、京都でさらに大きな事件（京ア二放火事件）が残念なことに起きました。

植松被告は施設の元職員

次に、植松被告の経歴と考え方です。この事件は非常にショッキングな事件ですが、それをより鮮明にしているのが犯人として捕まった植松被告が施設の元職員ということでした。彼は元々教員免許を取って学校の先生を目指していた学生だったようですが、進路を変えてやまゆり園に就職して働いていたということです。

同僚に「こういう人たちは死んだ方がいいのではないか」等の発言をするようになり、最終的には措置入院をしています。注目したいのが、犯行前に衆議院議長に「たくさん障がい者を殺すことができる」という趣旨の手紙を渡しています。「障がいを持つ人をケアしている保護者施設の職員を含めて非常に弱っている」、「障がいのある人は役に立たないので不幸しかつくることできない」と言っています。追い打ちをかけるようで心苦しいのですが、事件から3年たった今、彼はその考えを変えていない。それどころか何度も自分の考えを正当化する主張しているわけです。

事件後、「少しは役に立つ人間になれた」と発言

いろいろ調べていましたら、TBSのニュースで神戸記者という障がいを持つ子のお父さんが彼に繰り返しインタビューしています。この中ですごく重要と思うのは、植松被告は、障がい者を抹殺しろとっているのではなくて「心失者」、心を失ったもの、その定義はコミュニケーションができないということで、彼は一貫して自分の自己紹介ができるかというコミュニケーションに着目しながら、生きる価値がある人間とない人間を執拗に区別しようとしています。そのことを踏まえて、記者とのやりとりを見たいと思います。

記者は、「あなたは役に立つ人間と役に立たない人間の間には線を引いて、人間を分けて考えていますね。もしかするとあなたは、自分は役に立たない人間だと思っていたのではありませんか」。そうすると植松被告は、「大して存在価値のない人間だと思っています」と返しています。神戸記者は「もしかして、あなたは事件を起こして自分は役に立つ人間の側になったと思っているのではないですか」。植松被告は「少しは役に立つ人間になったと思います」と述べているんですね。ここはすごく大きなポイントだと思っています。

一年前に『開けられたパンドラの箱』という本が出ているんですが、この本で植松被告と著者の手紙のやりとりで彼がどんなことを言ってるかを知ることができます。「役に立つということをめざしてやった」と言ってるんですね。記者が問うたように、「自分は日頃役に立たない人間だけれど、事件を起こしたことで役に立つ人間になった」、こう考えているわけです。私はこの考えについてコメントしたいと思います。

「役に立つ」側に立ちたくて命を奪う

第1回のシンポジウムで私はこう述べました。「彼は障がいがある人の人生に意味はないと言いましたが、なぜ障がいがある人だけが人生に意味を問われなければならないのか。私たちは日頃、自分の人生に意味があるから生きていきたいと思っているか。ただ毎日苦しいことも楽しいこともあって生きてるだけじゃないのか。なぜ障がいがある人だけが生きる意味を証明しないと生きてはいけなくなるのか、ということを感じました」。今日はちょっと違った話をしたいと思います。

彼は「役に立つ」ということにこだわっています。こういう議論に対して、何を持って役に立つというのかという議論もあり得るし、できると思います。私はそれとは少し違ったこと、「役に立つということを求めすぎて彼はおかしくなったんじゃないか」という風に思えるんですね。役に立とう、役に立とうとして、最終的に彼から見て役に立たないと思われる人たちのグループをつくって、その人たちを攻撃する、それで自分は役に立つ人間の側なんだと思い込もうとする論理ですね。

ごく自然に一から考えてみると、なぜ私たちは役に立つことを良いと思うのか。役に立つというのは、知識とか技術とか、それを持っていて、それを使うことでそれがなければ生きることができない人が生きることができるとか、それがなければ経験した範囲でしか生きることができない人の選択肢が増えるとか、そういったことが起きるから私たちは何々は役に立つと言うんじゃないでしょうか。

そうすると、なぜ役に立つことが良いことなのかというと、それによって人が生きたりすることができる、あるいは豊かに生きることができる、そう考えることができます。ということは、生きることより役に立つことは大事ではないという事になります。役に立つのがよいことであるのは、生きることがよいことであるからであって、逆ではない。そうすると役に立つことのために人の命をなくしてしまう、あるいはその人を攻撃してより生活しづらい立場に追い込むということは、究極的に転倒した発想になります。

役に立たなくてはいけいないのかという問題提起もあっていいと思うのですが、役に立つことはいいという所までは彼の土俵に乗っかって、と今回は考えます。

役に立つことは、それでみんなが楽しく生きられるから知識や技術は価値がある、どうしても役に立つ人間になりたいからといって、人の命をなくしてしまったらそれ

は本末転倒になると言えると思います。

「家族の行き詰まり→施設」の限界

最後に、今日のシンポジウムが一回目、二回目と少し異なるのは、相模原事件の問題から地域に生活する障がいがある人の諸課題とか、これからなすべき事とかを話す場ということですので、この事件と障がい者の地域生活がどう関わってくるかということをお話ししたいと思います。

ポイントは「ケアの役割」ということから考えていこうと思っています。川野陽子さんからありましたように、この事件が起きたときに、なかには「みんなが思ったことをやってくれたのじゃないのか」というようなことがインターネット上などでは言われていました。「親もまわりも困ったから施設に入れるんじゃないか。その人たちをなくしてくれて助かったじゃないか」というような見解まであります。そこまで積極的に賛成するものでなくても、「やっぱり重度障がい者は生きていくのは大変だな」というような、消極的賛成という見解もあります。

これに対して、事件から地域生活のことを考えると、例えばやまゆり園のような大きな施設ができる前に、家族はまったく支援がないなかで障がいのある人をケアしてきました。それは、まわりから見たら抱え込んでいるということになるけれど、当の本人たちから言うとこれ以外に生きていくすべがないというような状況だと思います。その結果、その人が生きていくために必要なケアが一カ所に集中する。このことは植松被告に賛成するような意見と大きく関わっていると思います。

家族が面倒見るしかない時代に、家族が行き詰まると心中などが起きる。それは困るということで施設に救いを求めて、大きな入所施設がたくさんできる時代があった。そうするとそこにケアが集中して、施設は管理のために普通の生活ではあり得ないようなルールをたくさん設ける。場合によっては介護の邪魔だからという理由で不妊手術を受けさせたりする。そんなことが実際に起きてきたのです。

生きるためにケアを必要とする人がいます。それは障がいがある人に限りません。だけど、どんな人のケアも一カ所に集中してしまうといろんな問題が起こってきて、ケアしている方が非常に負担になってくれば、この人たち生きるの大変じゃないか、という風になってくる。

「ケアの集中」から「地域で介護」へ

では、どうしないといけないかということ、地域でいろんな人がケアに関わることで。今、障がいがある人が地域で暮らせるという議論が盛んですけど、場所がその人1人の家だったとしても、ケアしに来てくれる人がまったくいないとか、非常に少ない人に頼らざるを得ないとなると、すぐにいびつな関係になりかねません。

そこで僕がずっと研究している青い芝の会の人たちは、「地域の人たち全員に介護する義務がある」と言うんです。みんなが介助しなければならない、1人の人ではダメ。この主張は市民権を得ているとは言えないんですけど、今日もお見えになっている自立生活センターの方々が努力されて、地域で介護者を得て、それにきちんと報酬を支払うという形でその関係を安定させてきました。

方法はいろいろあるけれど、支援する側にとってはこの人は私がいないと生活できないと言う状況になると、その関係は不安定になります。障がいがある人から見たときに、その人しか頼ることはできないとなると、その人に自分の本当の思いを言うたりできなくなる。するとおかしい、まわりから見たら異常としか思えない関係になりかねない。この、ケア役割をほどよく分散する、そのことを相模原事件が問うたのです。

多くの施設の職員などを経験した人たちが、「植松被告がやったことは悪いけど、気持ちが分かる」とコメントしたりしています。それは、ケアの役割が集中して、ケアをする側も受ける側もお互い、消耗していく。そしてそこに密閉されてしまう。そういう問題が家族で起きれば、心中という問題になるし、それを家族で抱えすぎるたら「親は敵だ」と“青い芝”（障がい者の団体）は言いますが、その問題につながってきます。でも親から見たら他にどうすればいいのか、という問題になります。それはケアの役割の集中という言葉で説明できると思います。そのことを相模原事件は私たちに今も突きつけていると思っています。

これからパネルディスカッションが始まりますので、そのきっかけになればと思っています。

ーパネルディスカッションー

重度障がいのある人と共に地域で生きていくという事

司会 それではパネルディスカッションの準備ができましたので、ここからは、司会進行を徳田先生へお願いしたいと思います。徳田先生は1969年に弁護士になられ、ハンセン病訴訟西日本弁護士代表、九州HIV訴訟代表、在宅障害者支援ネットワーク代表世話人、だれもが安心して暮らせる大分県をつくる会の共同代表等様々な活動に携わり、活動されています。それでは徳田先生、よろしくお願い致します。

コーディネーター	徳田靖之さん（弁護士）
パネリスト	財津浩子さん（家族）
	川野陽子さん（障がい当事者）
	宮西君代さん（障がい当事者）
	村田憲一さん（支援者）
助言者	広野俊輔さん（大分大学）

地域で生きるために何が必要か - はじめに

徳田靖之 皆さんこんにちは。天気の良くない日に多くの皆さんに参加していただきありがとうございます。過大な紹介を受けましたが、私は障がいのある人もない人も誰もが安心して暮らしていける大分県をつくる会の活動を自分の一番大事にしている活動としてこれまでやってきました。今日もこうした一員としてこれから始まるパネルディスカッションの司会を務めさせていただきますので、よろしくお願い致します。

大事なことは、なぜあれだけの人がやまゆり園という施設のなかで暮らしていくことを余儀なくされたのかという問題だろうと私は思っていて、この問題を考えていく上で重い障がいを持っている方たちが地域でどうして暮らしていけなかったのか。そこの問題に解答を出さない限り、私たちはやまゆり園の事件を乗り越えていくということにはならないのではないか、ということで、今日は相模原事件を考えながら重い障がいを持っている方たちが地域で生きていく上で何が必要なのかということに重点を置きながら話を進めさせていただこうと思います。

最初に今日、パネリストとして話をさせていただく皆さんを紹介していきたいと思えます。川野陽子さんからお願いします。

重度障がいの仲間を応援したい

川野陽子 皆さん、改めまして、あっとほうむぶれいすの川野です。私はもともと中津市三光の出身で、2歳の時に進行性の難病ウェルド・ニッヒ・ホフマン病と診断され、修学とともに西別府病院に入院し、それから療養生活を送りながら小学部から高等部まで石垣原養護学校へ通っていました。2年前まで、中津を離れて日出町のほうで24時間ヘルパーさんがサポートに入り、一人暮らしを10年間していたのですが、体調を壊して医療的ケアが必要となり、今は実家で訪問看護、訪問リハビリ、ヘルパーさんのサポートを受けながら、家族と奮闘しながら生活を送っています。ここまで回復して、今日のようなシンポジウムに参加できるようになるまで、本当にたくさんの方々に支えていただきました。

私はこの中津で、再び何ができるのかということと2年半、悩みながら考えてきたんですが、私と同じように重度の障がいがあっても、地域のなかで自分らしく、生活していきたい、そう思っている仲間の応援をしていきたいという思いに至りました。そういったことから今日は車イスの皆さんがたくさん別府から来てくださっていますが、ぐっどらいふ大分の支援を受けながら、中津でも障がい当事者が主体となって自分らしく、自分に合った形の生活を応援していける団体の活動拠点の準備をしている段階です。

パネルディスカッションはあまり得意ではなく、毎回与えられた時間を大幅にオーバーする傾向があるのですが、今日は皆さんと一緒に思いを共有しながら、一緒にテーマについて考えていきたいと思います。よろしくお願いします。

徳田 では次に宮西君代さんお願いします。

宮西君代 みなさんこんにちは。だれもが安心して暮らせる大分県をつくる会の共同代表をしていますが、それ以外は在宅で遊んで暮らしています。あまりえらそうなことをここでいう立場ではないのですが、相模原事件の初回シンポジウムから、今回三回目になります。まさか中津まで来てこういう形で話すとは思っていませんでした。今日はよろしくお願いします。

20年間、日々介助の仕事

村田憲一 こんにちは。社会福祉法人こころの樹で歩みの会生活学校という多機能型の事業所の職員をしています、村田憲一といいます。歩みの会生活学校は障がいを持っている方、重度の方もですし、B型をやってますので少し就労に対して力を注げる方も利用している事業所です。そこで実際に日々サービスを、トイレ介助や食事介助などのサービスを提供する仕事をしています。最近諸事情で現場にいないことも多い

のですが、なるべく皆さんと顔を合わせたりして日々過ごせるようにしています。支援者の立場からということでパネラーとして加わっています。

自己紹介のために自分の経歴を考えてみると、自分でも驚いたのですが1999年から20年この仕事をしています。今日は支援する側の代表ということではなく、自分自身が考えてきたことを皆さんと意見交換をして、今後につなげていければと考えています。よろしくお願いします。

徳田 財津さんからは、お子さんに障がいがあるということで、お子さんのビデオを皆さんに見ていただいて自己紹介をしていただきたいと思います。

障がいのある子の「命」を伝えたい

財津浩子 皆さんこんにちは。今ビデオで歌を歌っていた、財津杷子の母の財津浩子と申します。川野陽子さんとはいとこになります。

私には二人の子どもがいます。長男は先天性リンパ管腫という珍しい病気を持って生まれてきました。九大病院で治療のために入退院を繰り返し1歳から4歳まで気管切開をしていました。リンパ管腫は完治が難しいのですが、現在は元気に小学校に通っています。3歳になる長女の杷子は21トリソミーダウン症です。元気いっぱいのお転婆娘です。二人を育てて感じた命について、母親の立場からですが、伝えていけたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

徳田 以上の皆さんと一緒に相模原事件、一般的にはやまゆり園事件と呼ばれていますが、この事件を話し合っていきたいと思いますが、まずはそれぞれの方からこの事件をどう受け止めたのかということをお話しいただきたいと思います。最初に川野陽子さん、いいですか。

相模原事件をどう受け止めたか

「私も被害者の一人だったかも」、同時に「被告は孤独」とも

川野 相模原事件が起こった3年前、真っ先に思ったことは「もしかしたら私も被害者の一人になってたかもしれない」ということです。それと同時に、「障がい者なんかいなくなればいい」「生きてる価値がない」と考え、そしてその考えを正論として重度の障がいを持つ人の命を奪う卑劣な行動を起こした植松被告のことを、「彼は何て孤独なんだろう」と思う自分がいました。

植松被告と被害に遭われた重度の障がいのある人は、支援する側、支援される側の関係でした。私は体調を壊して中津に戻る前、日出町で24時間ヘルパーのサポート

を受けながら一人暮らしをしていました。24時間を2人から3人のヘルパーが交代しながら私を支えてくれていたんですね。夜の支援は介助経験のない学生のバイト生や、フリーターの若いスタッフが数多くいました。ただ単にお小遣いを貯めるという目的でバイトをする子もいたのですが、自分の経験の一つとしてやってみようかなという子、また自分に何ができるのか、ずっと迷いながらなかなか定職に就けずにいる子、自分に自信を持てずコミュニケーションをとることが苦手な子、何かしらのコンプレックスや社会の生きづらさといったものを抱える若いスタッフが多くいました。

支援される側が支援

私のように重度の障がいがあると、生活を支えるヘルパーの存在は本当に必要不可欠で、分身のような、一心同体のような密接な関係性を生みます。長時間一緒にいることでヘルパーとの関係は、時としては家族以上に深くなるんです。そういう人たちが夜勤になると、「元彼とどうしたらいいかわからん」、「友達からこんなこと言われて川野さんどう思う」、「実は誰にも言えずに悩んでいることがあって」、「実は私は」というようなカミングアウトをしょっちゅう若いヘルパーから受けていました。

結構長いんですね、それが。2時間とか3時間。私はトイレに行きたいんですよ。それを我慢しながらひたすら聞いている（笑）。おかしいでしょ。支援に入っているヘルパーに支援を求められず、トイレを我慢しながら延々と話を聞いてるんです。そういった関係性で、支援者と利用者という関係性を越えた心のやりとりをたくさん重ねていました。そんな若いヘルパーは大学を卒業して、結婚、出産を期にそれぞれの道で活躍してるんですが、今でも連絡してくる人が多くいます。先日も電話がありました。「川野さん、久しぶり、ちょっと聞いてよ」。また延々と2時間あまり。「今は事務の仕事をしてるんだけど、やっぱりヘルパーの仕事をしたい」と言います。正直、すごいうれしかったです。

またあるヘルパーは、大学生だったんですが、大学の卒業式の次の日、「うちの父と母が川野さんと会いたがっているから」と言ってくれて、その両親と一緒にカフェでお茶をしました。その時、お母さんが「この子すごく頑固でね」と言うんですね。確かにその子はすごく真面目で、2年間1日も休んだことがなくて、完全な介助をしていました。「この子は物事を真四角に見ることしかできない性格だから、人の失敗とか間違いを許せないという性格を持ってるの。だけどヘルパーという仕事をして、物事を広く丸く見られるようになって、性格が変わってね。いろんな人がいるんだ、失敗してもいいんだ、と思えるようになったの。本当にありがとう」と言われたんです。そんなに言われて、2時間トイレを我慢して話を聞いた甲斐があったなと思う反面、支援を受けている私のほうが「いつも介助をしてくれてありがとうございます」という立場でありながら、ありがとうという言葉をもらえるんですね。そういった、スタッフたちとのやりとりはヘルパーと利用者という枠を越えて、互いに影響を与え、

お互いに認め合うことの素晴らしさを学ぶ場でした。

障がいがあってもなくても同じ

人は生きていく上で、たくさんの人と出会います。その中でお互いに影響を与え合いながら成長し、生きることの楽しさや、誰かのために役に立っているといった充実感や自分の存在意義を感じます。それは障がいがあってもなくても同じです。私も人として何かの役に立ちたいと思っている人の1人です。

「障がい者なんかいなくなればいい」と殺人を犯した植松被告のことを決して許すことはできません。ただ、その一方で植松被告自身が、幼少期から大人になるまで、まわりから認めてもらえず、まわりから受け入れてもらえない、そんな気持ちを抱きながら、自分自身の生きる価値を見いだせず、ずっとずっと孤独を抱えながら生きてきた若者の1人ではないのかなと感じていました。

徳田 ありがとうございます。この事件の本質的なところに関わる発言をいただきました。またあとで話を聞かせてください。では次、宮西君代さんお願いします。

言葉の障がいがあっても地域で生きている

宮西 みなさん、私の言葉が聞き取れますか？ そう、初めての方はすごく集中して聞かないと聞き取れないと思います。どうしても聞き取れない方は、要約筆記の方をご覧ください。でも、こういった言葉の障がいがあっても、自分の考えや意志をちゃんと持って地域で生きている現実を生で見、努力をして聞き取りをしてください。

実は、私の熊本にいる母親は90歳を過ぎて耳が遠くなって、電話で会話ができにくく、コミュニケーションがとれなくなって困っていますけど、母も結構一生懸命聞こうとしてくれます。言葉やコミュニケーションってすごく大事で、言葉やコミュニケーションに障がいがあると誤解を生んだり、実年齢より低く扱われたりします。私は実は50歳過ぎですけど、小学生以下の言葉遣いをされることがしばしばあり、その場ですぐ反論ができないので、ボロボロになってしまいます。今回犠牲になられた方々、意思疎通やコミュニケーションに障がいがあった方々がほとんどです。言語やコミュニケーションの大切さを分かってほしいのです。もうこの前おきで終わってもいいのですが、もう少し聞いてください。(笑)

怖い“愛と正義”のエスカレート

この事件をどう受け止めたか？ですが、ショックや怒りというより、ものすごく冷静な自分がいました。事件ってどこでも起こるよなー、一般的に施設が安全な場所という考えが崩れたと正直に思いました。それは、私の両親が「障がい重度になったら、施設に入りなさい」。いや、私が「24時間介護が必要になっても地域（大分）で暮らすよ」と言うと、「ヘルパーさんが入れ替わり立ち替わり来て、いろんな人が

いて気も使うし、一対一は危ない。施設だと気をつかわんで安全でしょう」。そんなやりとりがあったからです。

私は養護学校の12年間、寄宿舎という施設同様の場で暮らしました。再び施設に入れようとする親に対してむかついたけど、親は施設で生活したことはないし、世間一般的に親や家族が見れなくなると施設に入るべきだという風潮が根強く残っているからしかたないかな——とやり過ごしたことがこの事件で蘇りました。私は、施設を全否定する気はありませんが、大規模なああいう施設は入りたくないです。

もう一点。脳性麻痺の青い芝の会の会則に『我々は愛と正義を否定する』とあります。私なりに解釈すれば、言語による意思疎通が困難だったり障がいが重度だと、本人を無視して、勝手に社会の側が“正義”をちらつかせて、「教育は、いじめもなく設備の整った支援学校の方が子供さんのためです」とか、あるいは「同じような仲間がたくさんいる所での生活が幸せでしょう」とか、私たちの家族をそうやって説得して、「そんなもんかなあ？ 我が子のためになるなら仕方ないね」って、そうやって昔から住み慣れた地域から遠ざけられていきました。

それがどんどん、歪んだ思想の“愛と正義”がエスカレートして、「障がい者はいなくなればいいでしょう」にまで突き進んでいった恐怖を感じます。

徳田 重たいテーマですが、言葉のコミュニケーションが取れるかどうかで役に立つかどうかを判断するということに対する君代さんの怒りみたいなものを感じる発言でした。

この事件で衝撃だったことは、先ほど廣野さんも言ってましたが、犯人が施設で働いていた職員であったということがあります。村田さんは、自分は支援者として発言すると言われていましたが、施設で働いているという立場でこの事件をどういう風に受けとめたかということを少し話してもらえますか。

施設と地域の壁をなくせば

村田 ニュースを見たときいろいろ考えてしまいました。元職員の犯行ということが一番大きかったと思います。彼が根底でどんなことを考えていたんだろうか。この仕事を選んだ動機は何なんだろう。自分がもしそんな思想を持っていたとしたらどういふ選択をするだろうと考えたときに、対岸の火事のように障がいのある人の生活を別のものとみていたら、それを受け入れられないのであれば近づかないのじゃないかと思いました。ところが自分からここに入っていった。犯人が目標を達成したということになるのか、それとも入ってから関わってから変化をしたものだろうか。

犯人の背景として、家庭のプレッシャーがあったのではないかとか、失敗とか挫折に対してのとらえ方だとか、いろんなことで追い詰められていたことがあったのかな

ということも想像はできます。だれが役に立ってだれが役に立たないと選別される状況のなかで、自分が役に立つためには何をしなければならぬかという形で追い詰められた結果、間違っただけで「役に立つ」ことを考えてしまったということがあるのかと思います。でも、これはもう紛れもない大量殺人の事件です。

事件の後、厚生労働省とか国からいろんな文書が届きました。このような事件を起こさないために防犯カメラの設置に補助金を出しますよとか、防犯体制をどうするか、門に鍵をととか、いろんなことを言ってきました。でもこれは再発の防止になるのか、うちの法人でもなかで話をしました。なぜなら、彼が言ってるように自分の思想を世に知らしめるためであれば、防犯カメラは無意味です。下手すると犯行後に防犯カメラに向かってガッツポーズをすることが目的です。じゃあ壁、鍵でしょうか？今回は元職員ですが、現職のままこの行動を起こされたら、夜勤のスタッフがされたらもう無意味ですね。

じゃあ、今後起きないようにするために出来る事は何かと言われたら、ものすごく難しいですが、地域の関心、周囲が異変に気づける場所、逆に言えば壁がない場所とあったこともあります。壁があるとなかで起きたことが周りに漏れません。であれば発見も遅れるし、対応も遅れるんじゃないか。でも壁がない場所であれば、周囲が気づいてもっと早い段階で動けたかも知れない。そのときに、先ほど宮西さんからもありましたけど、余りにも大きすぎる集団というのは難しさが増してくるなと思います。

実際に施設のなかで働く人間として、このことを今後起きないようにするにはどうすればいいかということ考えたときによく分からないところが多いんですが、自分なりにお話しさせていただきました。

徳田 ありがとうございます。時間があまりないのでそこを深められないのは申し訳ないのですが、おそらく彼自身はやまゆり園に就職するときに「役に立ちたい」という思いをかなり強く抱いて入ったことだけは間違いのないと思います。役に立ちたいという思いが結局、自分が相手をしている人たちとの間で自分が何もできていない、そういう意味で生きがいを持って生きたいという思いが挫折した。そのときに、彼が挫折した自分をどういう形で正当化しようとしていったかというところに問題がいろいろあったんだと思います。

私も、重大な事件を犯した犯人を何件も弁護した経験があるんですけど、今彼が自分がやったことがとんでもないことだという風に彼が認めてしまうことは、彼自身が自分を抹殺するという形でしか先の行動が出てこないんだと思います。だから、犯人は今、自分がやったことは間違っていなかったと言い続けることが、いわばギリギリのところにいるという感じがします。この問題は時間があつたらまた議論したいと思います。

「いのちの選別」をどう受け止めるのか

徳田 この事件は、何をにおいても先ほどからパネリストの皆さんのお話の中に出てきていますように、「いのちの選別」ということが私たちに投げかけられた大きなテーマだと思います。「役に立つ」、あるいは「迷惑をかける」、この二つ。役に立つのか立たないのか、あるいは迷惑をかけるのかかけないのか。この二つの言葉をキーワードとして、「生きていく意味のあるいのち」と「生きていく意味がないいのち」ということを振り分けようとする。彼はそのなかでだんだん振り分けの基準を変えてきて、今役に立つか立たないかというところに立っているんですが、その前には生きていることが人に迷惑をかけるだけだと言うことを盛んに言っていたわけです。

じゃあ、人が生きていくときに生きていく意味があるいのちと意味がないいのちという選別をするという考え方自体を、私たちが本当に打ち抜かないとこの事件を超えたことにはならないのではないのかという感じがするんですね。

先ほどかなりエネルギーを使ったと思うんですが、君代さんいいですか。このいのちを選別するということについて感じていることを少し話してもらっていいですか。

今も根強い優生思想 - 不妊手術・出生前診断

宮西 この事件でショックを受けた方々も多かったんですが、その後にネットでの書き込みで犯人を賞賛したり、賛同したりすごかったです。そういう人たちって、社会に何らかの生きづらさや不満をいろいろ抱えている、思い通りに生きられない、そういう人たちではないだろうか？あるいはその反対で、競争社会をひたすら歩んだエリートかな？と思いました。

昔はネットがなかったから、その場で面と向かっていろんなことを言われました。私のように言葉が不自由で片言しか話せないと、なにも理解できないと思って、私が幼いころ「よくこんな子育てしているね、私は育てきれん」と言った人の顔を忘れることができません。私はこのおばちゃんの子なら殺されて今いないんだと思って凄く怖かった記憶があります。それは、私を一生懸命育ててくれている母への褒め言葉のつもりだったのかもしれませんが、私を目の前に言われたことが応えました。

それに、よく「あなたより障がい者が重度の人がいる。おなたはまだ動けるからましじゃない。がんばりなさい」と慰めや励ましのつもりで言われる言葉が、差別や優生思想の考えかたから来てるのではないのでしょうか？ この数年も、「働かなくていいね」「年金泥棒」とか言われて、夢にまで出てきたけど、そんなのいちいち気にしていたら生きていけないから、できることを精一杯して楽しんで生きています。

仮に、障がい者がいなくなったらどうでしょうか。エリートばっかりの社会って楽

しいのでしょうか？経済発展するのでしょうか？いろんな人がいて、そこからいろんな発想が生まれて、人を思いやったり支え合ってこの世の中が成り立っているとは思いませんか。

優生思想の考えは昔も今も根強く、旧優生保護法のもとで障がい者をつくらない、障がい者は悪いこと、障がい者をこれ以上残してはいけない、そういう理由で強制的に不妊手術が行われていました。トイレが自分でできないと施設の職員に迷惑がかかるからという理由で不妊手術が行われていました。今はどうでしょうか。

今も形を変えて、新たに遺伝を心配した出産前診断で異常が分かるとこの世にせつかく授かったいのちを誕生することができないというケースが起きています。だから形を変えながら今も昔も、おそらくこの国が資本主義の競争社会である限り優生思想は永遠に続いていくと思います。

それに対して私たちは、手を抜くことなく、ずっと、私は地域で生きて、戦い続けていかなければいけないと思います。

徳田 ありがとうございます。いろいろな難しい問題も話していただきました。旧優生保護法のお話が出ましたが、いのちの選別をするというのは、あの事件の犯人や国の考え方というだけではありません。実はナチスの時代もそうですけど、私たちの国も戦後一貫して1996年に法律を廃止するまで、「重い障がいがある人たちに対して子どもをつくらせない」という手術を強制したわけです。この優生保護法等が国民にまき散らした考え方はどういうことを言っているかということ、障がいのある人に対して「あなたのような子どもを産ませない」という考え方です。そのことは「あなた自身の生きている意味はない」ということとほとんど同じ意味になります。こうした旧優生保護法の問題について、「いのちの選別」に関する研究者として廣野さんコメントをいただけますか。

「この人たちはマイナス」というやり方は危険

廣野俊輔 今までのパネリストの方のお話を踏まえながら、いのちの選別について何が問題かということをしただけお話ししたいと思います。

宮西さんがおっしゃった障がい者がいなくなって世の中がエリートばかりになったらどうなるのか、おそらくそのなかでエリートと言われていた人のなかでまた格差ができてきて、そして比較的劣ったとされる人が出てくるということがつくり出されてくる。するとその人たちが選別されることになる。そのことは社会の基盤を切り崩すことになるのではないかと思います。

旧優生保護法の話も出しましたが、僕が強く思っていることは、僕自身小さい頃は自分のことが気に入らなくて、どうしてもっといい頭に産んでくれなかったのか、ど

うしてもっと速く走れる体に生んでくれなかったのかと言って、ずいぶん親を困らせたと思うんです。今僕に一ヶ月になる子どもがいます。初めて分かったことは、親も同じなんですね。誰だって自分の体を選んで生まれてきてないし、人間というのは決定的に受動的な存在だと思うんです。どういう風に生まれてくるのか誰も選べない。だけど、どういう風に生まれてもその人なりの人生を开花できるように工夫してきたところに人間の良さがあるんじゃないかと思います。役に立つことを示すために「役に立たないものを消すのが自分の役割です」というのは非常に安易な考えじゃないか。自分のプラスを示すんじゃなくて、「この人たちがマイナスです」というやり方はこれは非常に安易で危険だと思います。

1981年に国連総会で「国際障害者年行動計画」が決議されますけど、その中の僕の好きな言葉を紹介したいと思います。

「ある一部の人たちが閉め出されるような社会は、それは弱くてもろい社会なんだよ」と書いてあります。一人ひとりとはどんな風に生まれてくるか分からない。僕がそうであるようにもっとこうあったらなと思うところがある。だけどみんな一日一日過ごしていく。そのために役に立つことが本当はあると思います。

「迷惑をかけるけどよろしく」という社会に

もう一つだけ、徳田さんがおっしゃった「迷惑をかける」、これは本当によく言われることで、「迷惑をかけない限りは自由」というのはすごく一般に受け入れられやすい考え方だと思いますが、本当は逆なんですね。迷惑はかけるんですよ。迷惑をかけずに生きることはできないんじゃないか。僕の生まれた子どもを見てもそう思います。泣くか、寝るか、ミルク飲むか、どれかしか今してません。夜中でも泣いたら、こっちがなんやろなんやろと言うんですね。コミュニケーションができないということに犯人は言ってたんだけど、赤ちゃんだってコミュニケーションはできない。

彼は、コミュニケーションができるかできないかが人間の大事な要素だと言ってるんだけど、実は彼自身、人が自分の分からない形で発していること、これに気づく力が非常に弱いんじゃないかと思われま。あるいは、コミュニケーションに偏重していると言うことは、「表現されていないことは、ないと同じだ」という考え方が背景にあると思います。重い障がいのある方で言葉を発しないと、そこに何も無いわけじゃないということがよく分かっていないんじゃないか。

「迷惑をかけないから生かしてください」じゃなくて、「迷惑かけるけどよろしく」という社会にしないといけないと思います。

徳田 ありがとうございます。財津さん。今日、財津さんにぜひ出てほしいと願ったのは実は川野陽子さんです。障がいのある子を抱えながら頑張っておられる母親の姿を通してこの事件とまったく違う考え方を明らかにしたいというのが川野陽子さん

の思いだったと思うんですが、母親という立場で杷子さんを育てながら思っておられることをお話しいただければと思います。

厳しい現実、保証のない将来

財津 相模原事件は杷子が生まれてすぐに起きた事件です。私は犯人の気持ちはまったく分かりません。犯人も障がいのある子どもを持つ親の気持ちはまったく理解できないと思います。二度とこのような事件を起こらないようにするにはどうすればいいのか。犯罪者を生み出さない環境づくりが大切なんではないかと思います。

いのちの選別という話が出ました。いのちの選別というと出生前診断を思い浮かべる方もいらっしゃると思いますが、出生前診断は大抵ダウン症などの染色体異常が主な対象です。私は出生前診断を肯定も否定もできません。この検査は、そもそも陽性だったら中絶をすることを前提として受けるもので、もし障がいがあっても生んで育てる人はわざわざ高額な検査費を払ってまでは受けないと思います。検査を受けて陽性だった人の9割が中絶を選んでいるらしいんですけど、当たり前なのかなあと 생각합니다。

私は杷子を41歳で生みました。高齢出産ですね。出生前診断を受けようとはまったく思わなかったです。妊娠したことがとてもうれしくてたまりませんでした。それにまさかダウン症の子どもが生まれるとはまったく思っていませんでした。杷子がお腹から出てきて顔を見た瞬間の衝撃は凄まじいものでした。一目でダウン症とわかりました。精神的ダメージと自責の念で頭がおかしくなりそうでした。

杷子を産んだことは全く後悔していませんし、本当にかわいくて仕方ありません。でも、ダウン症で良かったとは思えないんですね。他人の好奇の目にさらされて、健常児とは違う成長をして、進学も就職もハンディがあります。自分が死んだ後のことまで心配しなければならない。私が死ぬときは一緒に連れて行こうと思いました。「ダウン症の子は天使(エンジェルキッズ)なのよ。あなたに育ててもらうために、あなただったらきっと愛してくれるから、あなたを選んで生まれてきたのよ」とよく言われます。とてもステキな言葉ですが私にはあまり心に響かない言葉です。現実には厳しく将来の保証は何もないのです。

出会った人が心の支えに

私は、検査で中絶を選んだ9割の人が決して悪いとは思いません。きっと、精神的にも、経済的にも、環境的にも、いろんな要因で諦めざるを得なかったのだと思います。育てるには相当な覚悟が必要です。幸い杷子に関わって出会った人たちのほとんどはとてもかわいがってくれて、私や彼女を励まし、心の支えになってくれています。もし健康な体で生まれてきたら絶対に出会うことはなかった人たちとつながることができました。何より、長男も杷子も愛おしいです。

日田市でも、「日田市障がいによる差別を解消し、誰もが心豊かに暮らせるまちづくり条例」が4月から施行されました。障がいを持つ方も安心して暮らせる環境も少しずつですが整いつつあります。

たまたま私が病気持ちの子とダウン症の子を産みましたけど、例えば、障がい児を産んだ夫婦や検査で中絶を選んだ夫婦の心のケアをしてくれる専門機関があればなと思います。中絶を心の傷として一生とらわれることなく、また障がい児を育てる親が自分を犠牲にすることなく生活できれば私は理想かなと思います。

徳田 そばで聞いていて、気持ちが洗われるというか…。ありがとうございました。

この事件の時に、亡くなった方々の氏名を公表しないということが起こりまして、いのちを奪われた人の名前を明らかにしないということは、その尊厳をどう考えているのかという意見がありました。私もそういう意見の一人ですが、今の財津さんのお話を聞きながら、いろんな角度から判断をする必要があるんだなということを感じました。

重度障がいのある人が地域で生きるために何が必要か

徳田 いのちの選別ということについては、語っても語っても語り尽くせない問題があるんですけど、今日はもう一つ大事なテーマがあります。それは今日のテーマの一つである「重い障がいを持っている人たちと地域で生きていく」ということ、これを私たちはどう考えればいいのかということなんです。先ほど廣野さんはケアの分担ということを提案していましたが、文字通り地域で生きていくということをこれまで実践してこられた陽子さんに、あなたにとって地域で生きていくことがどんなに大切なことなのか、それを実現していく上で何が必要で何が足りないのか、切実な思いを話していただきたいと思います。

公的支援＋地域のつながり＋理解者

川野 今回のシンポジウムのメインテーマになりますが、重度の障がいを持つ私たちは、地域で生活することが、家族だけですべてを抱え込むのではなくて、公的な支援を使ったり、仲間づくりや地域のつながり、たくさんの理解者を増やしていくこと、この三つが一緒になって初めて人間らしく豊かに生きることができないのではないかと感じています。

障がいのある人の地域移行と言われてすいぶん経ちますが、私たちのように重度障がいのある人が地域で生きていくにはまだまだ支援体制が未熟であると感じています。高校卒業後の進路にしてみても、就労支援をしている事業所は私が高校を卒業す

る頃より遙かに増え、選択肢も増えてはいるんですが、必ずしも自分の望むところで自分の居場所を持ち生きがいを感じられているかと言えば、そうとは思えないなと感じています。

というのは、先日、このシンポジウムの開催をお知らせするのに中津の支援学校に伺ったんですね。そのときに校長先生といろいろな話をしました。そのときに校長先生に「今はいろんな選択肢があって本当にいいですよ」ということをお話しした時に、先生が「いや、医療的ケアが必要な重度の生徒さんを受け入れる事業所を探すことは一気にハードルが上がる」と言われました。

医療的ケアが必要な人への支援を

実は私も医療的ケアが必要な一人です。体調を壊し、食べ物を飲み込む力が弱くなった時は、胃から直接栄養を注入する「胃ろう」の造設をしました。私は難病ですが、どんなに障がいが増大しても地域の中でまだまだ生きていきたいという思いで「胃ろう」を造る決意をしました。

胃ろうというと終末的なケアというイメージがあるんですが、決してそうではないんです。生活の質を高める一つ的手段と考えています。私は食事、ご飯を食べるのが一時間半もかかるんです。膨大な時間がかかるので、食事づくりを含めると自分の好きなこと、してみたいことができないんですね。胃ろうから直接栄養を吸収することで、食事の時間を胃ろうに変えることで、1.5時間を自分の好きな時間にして生活の質を高めることにつながるんです。胃ろうをするとご飯を口から食べられなくなるという印象を持たれていますが、私は胃ろうで人生まだまだ長くいけるなと思っています。

現在は、ホールヘルパー、訪問看護、訪問リハビリの三つの支援を受けながら家族と一緒に生活しているんですが、その生活をサポートしてくれるヘルパーの数がなかなか増えません。事業所の努力によって、どんなに障がいがあっても地域での生活を送れるように、という強い理念で私の生活を支えてくれています。

「ヘルパー」という仕事は、きつくて大変そう、なんだか重たいものを背負い込むという気がして私には到底できない、ましてや医療的ケアが必要になると私なんかには到底無理だわということをよく言われます。高齢者の支援のイメージは割と皆さんできると思うんですね。だけど、障がいのある人の地域での生活を支える、それってヘルパー仕事なのって皆さんなかなかイメージがしづらいんですね。

私は重度訪問介護という重度障がいの方が利用する長時間ケアできる制度を受けているので、長時間いろんな場面をヘルパーと一緒に過ごすんですね。私たちにとってのヘルパーさんの仕事は、生活に必要な必要最低限のトイレ、お風呂、食事づくりだけではなく、人生のあらゆる場面、時間をともにし、その人に合った介助技術、コミュニケーション能力が求められたりします。時にはその人の人生そのものに大きく関

わることもあるとても大きなことをして下さるんですね。私自身はそういったヘルパーさんのサポートのおかげで、自分自身があきらめていたこと、できないと思っていたことに挑戦することができました。沢山の不可能を可能にすることができたんですね。そういった支援者の方の生活、保障をもっと国が認めていく、そういった見直しが必要なのではないかと感じています。

障がい者と家族からの発信で変わる

では、制度、保障さえ整えばそれでいいのかということもそうとも思えないんです。私たち障がい者は、必要なサポートを受けることで、ようやく障がいのない人と同じ人生のスタートラインに立つことができていると思っています。スタート地点に立った後はまわりに一人でも多くの仲間や、地域の人たち、理解者を増やしていくことで、私たちの人生がより豊かに大きな幅を持てる、質が大きく変わっていくと感じています。

私は二十歳の頃に中津の短大に入学しました。障がいのある生徒の受け入れは初めてで、大学では私の受け入れについて何度も話し合いが行われたと聞いています。受け入れが決まった後ではいろいろな配慮をしてくれました。大学の玄関にスロープが出来ました。長時間座ることがきつい私に教室にはベッドが用意されました。休憩できる部屋も用意してくれました。毎日、2階にある教室まではエレベーターがないので、友達が車椅子ごと抱え上げてくれていて、「ケチやなあ。エレベーターくらいつけてよ」と思うことも多々ありましたが、短大の先生いたらごめんなさい（笑）。ですが、この階段の上り下りを手伝ってもらうこと自体が友達づくりのきっかけにもなったんですね。不完全で未熟な環境だからこそ、生まれてくるものもたくさんあるということも学びました。

そして私の母は、私の短大入学を機に、大好きな仕事を辞める覚悟で私の短大生活を応援するよと言ってくれてたんですね。ですが、母の職場の上司の方々の理解で、「川野さん、仕事を辞めなくていいよ。大学への送迎時間を考えて、働く時間帯を考えていけばいいよ」という提案をしてくれたんですね。そのおかげで、母は大好きな仕事を続けながら私の短大生活を支えてくれました。そういったことを考えると、家族だけがすべてを抱え込むのではなくて、大学、友達、地域の方々、このすべてがかみ合うことで私の短大生活は成り立っていたと思います。その後、私の通った短大では、障がいのある生徒が立て続けに入学し、卒業していきました。

制度だけではなく、仲間や地域とつながること、そのために私たち障がい当事者、その家族は、沢山の方と沢山のふれあいを通して、うれしいことや、悔しいこと、困っていることを、外にどんどん発信していくことが大切だと思います。またそこに受け皿があるという環境が必要だと感じています。

今、重度障がいのある私たちに求められているのは、私たちの存在を知ってもらうこと、それが私たちに与えられた社会の中での大きな役割ではないかと感じています。

徳田 ありがとうございます。ヘルパーの平井さん、コメントがあればお願いします。

ヘルパーは楽しい！でも地域的な関わり必要

平井 ヘルパーをしていて、重度訪問介護の仕事は大変でしょう？とよく聞かれますが、「沢山の出会いがあるし、楽しいですよ！大変じゃない仕事ってありますか？」と答えます。重度障がいのある方々と話し、ふれあいや接する時間が増えていくほど、特別な事ではないと感じます。

重度障がいのある人が家族とともに生活していくうえで、医療チーム、介護や介助するヘルパーチームと地域の人達との総合的な関わりがこれからは必要だと思います。地域の人達との交流のなかで、重度障がいのある人への理解が生まれ、重度訪問のヘルパーさんの仕事も出来るなと思ってくれる人も増えてくれるように思います。

徳田 長く陽子さんを支えてこられた平井さんの発言だけに、重みがあるというか、やっぱりヘルパーって大変ですよ。村田さん、今のお話をお聞きになってご発言ありますか。

人員不足の原因は？

村田 支援する側が増えない、バランスが取れないということを感じるところはあります。人員不足で募集しても来ないというのはニュースでも見ますし、実感としても感じています。僕も、ボランティアなどでいろんなところに顔を出している一人なんですけど、福祉と関係ないところで話すと「そういう仕事ってすごいよね。えらいよね。私にはできんけど」と言うんですよ。なんか違和感感じて、何でできないとっているんだろうといろいろ考えます。特別な仕事なんだろうか？志が高い人でないとできない仕事なのかな？人の為にやってる偉い仕事なのかな？などと考えてしまっ、なんとなくそういう逆レッテル貼りをして、自分にはできない、対岸の火事という感じで関わりが薄いなと思っている人は何なんだろうなと思ってしまいます。ここを何とか、「違いますよ」ということを訴えかける先頭に立てたらいいなと思っていました。

自分が長くやってるなかで、すぐ辞める人もいます。何か違いがあるんだろうなといろいろ考えてたんですけど、さっき川野さんが言った「トイレを我慢しながら恋愛の相談とか愚痴を聞かされた」という話。支援する側と支援される側とが一方的な関係なんだろうか。お金が発生して仕事になればそうなんですけど、ただ自分がやった労働に対する対価というだけの関係だと、それは大変だとか割に合うとか合わないとかの尺度だけで、続けられるとか無理だという判断にしかならないですね。人と関わ

る仕事である以上、どんな接客業もそうなんでしょうけど、相手がいる以上戻ってくるものもあって、その中にどれだけ楽しさだったり、価値だったりをそれぞれが感じ得るかなあというところはあるんでしょう。

学びながら働ける仕事に

ただ、処遇が必ずしも良いとは言えないです。ここら辺は国とかに言ったりしないといけないと思うんですが、なんとなくボランティアとか志のある人の関わる仕事だから、多少不遇でもやってくれるでしょみたいなところがあります。やはりボランティアの延長ではなく、安心して一生働ける仕事としての位置づけを国、行政などがどれだけ本気で考えてくれるかということも重要だろうと思っています。

それは、知識がなくても、志とか考えたことがなくても、誰もがやりながら学びながら働ける仕事になるべきで、誰もが働けるよ、そのなかでいろんなものを学んでいたりできる、それは他の仕事と何か違うのかなあと思います。間口を広く取れる、他の仕事と同じように選択肢の一つとしてあるという状況があって、そのなかで向き不向きがあって、選べない人もいれば選べる人もいるという土壌ができてくるといいのかなあと思います。ただ、まわりから見て、負担や責任が医療的ケアも含めて大きいというのは事実あると思います。

地域の理解で「ケアの分担」

廣野先生が言われた「ケアの分担」というところも、僕がヘルパーをやったときに経験したことですけど、強度行動障がい、自分のことがうまく表現できなかつたり、まわりのものを壊してしまったり、自分や他人に対して傷を負わしてしまう発達障がいの人のことを強度行動障がいと言いますけど、その人とヘルパーとして散歩したことがあります。1時間でも2時間でも頑張って歩くんですね。僕よりも横も縦も大きい男性と手をつないで近所を歩くんです。なかなかヘトヘトになりますよね。そのコースに個人商店があって、その方が突然僕の手を引っ張ってその商店に猛ダッシュして止まらず、その人がなかのお菓子を一つとって、ジュースをとって出ようとしたんです。ヘルパーの僕はパニックです。手を引っ張っても止まらない。これは無理だと思ったときに、そこのおばあちゃんが「誰々君やろ、二つは多いけん一個置いて行きなさい。ジュースは置いてお菓子は持って行きよ。後でお母さんには連絡しとくから」と言ってくれて、また散歩を再開しました。そのときに「あっ」と思ったのは、彼はお母さんとその商店に来てたんですね。本来万引で警察に捕まってもおかしくない異常事態が、その人を知っていてそういう対応をしてくれたことで集中が分散されたんですね。地域とのつながりが大事だということはそういうことで、いつも関わっている家族だけの負担が地域に分散されていくと、ヘルパーをやる上でのハードルも下がるし負担も減ると思いました。

徳田 予定では、川野陽子さんの切実な問題提起を受けて、行政や社協の方々に意見を求めようかなと思ったんですが、予定した時間を超過してしまいました。いずれにしてもこの相模原事件は、障がいを持つ人たちがなぜ施設で暮らさなければならなかったのか、地域で生きていくということがどんな意味があって、社会に暮らす私たちは、行政を含めて何をしなければいけないのかということを一人生の課題として、私たちに問いかけてきたのではないかなと思っています。今日参加している皆さんがそれぞれの課題を見つけていただければと願っています。

最後に、残された時間で今日お話しいただいた皆さんに一言ずつご発言をいただきたいと思います。財津さんからお願いします。

ありのままの姿を受け入れて

財津 実家でテレビを見ていた時、幼児虐待のニュースを伝えていました。私が「虐待して殺してしまうくらいならうちの子にその体をもらいたい」と何気なく言ったんですね。すると私の母は「人の体はいらん」とただ一言言いました。その言葉にはっとさせられてしまいました。障がいや病気に関係なく孫のありのままの姿を受け入れている母にとっても感謝しています。

93歳になる祖母と暮らしていますが、最近では体の自由がきかなくなってきました。人間が年老いていく姿を身を持って私たちに教えてくれています。障がいのあるなしや年齢に関係なく、自分らしく当たり前前の生活が送れるようになればなと思います。

杷子が生まれて3年がたちます。生まれたときはすごくどん底の気分だったのですが、それに比べたら今までいろいろあったけど、こんな人生もありかなと思えるようになってきました。長男や杷子が、病気や障がいがあっても自分の人生楽しいなあ、最高だなあと思ってくれれば、私の人生も最高だなと感じられると思います。どうもありがとうございました。

選別に安心はない

村田 選別とか優生思想でもし仮に価値についてラインがあるとしたら、誰が引くんだろう、どんな基準で引くんだろうという疑問を持ちました。昔の人は木の実をとってきたら生きられるというラインがあったり、それが戦時中は兵隊さんになれなければとか、そんな時期があったんですけど、今は時々年収1000万円ないかどうかよとか、じゃあ1000万円にラインを引かれるとか、時代によってまったく違う不確定なラインです。インターネットの書き込みとか見ていてへーっとか思うんですけど、「俺のところにはラインはないんだ。ここにラインがあるから、ここより下の奴らは…」と主張している書き込みがすごく多いような気がします。ラインを引くとか引かれて、自分がどちらにいるかということを経験的な恐怖として感じている世の中なんだろう

なと感じます。

安心して生きられるって何だろうなと考えたときに、不確定な物差しで自分がここだと測ったり、物差しで見られ続ける生き方ってしんどくないかなと思います。廣野さんが言われたように、障がいがある人だけが命の価値を問われ証明しないといけないのか。すごく僕も衝撃を受けて、誰かが社会のなかでそういう不安にさらされながらみんなで生きている状態というのが安心できているのかなあとと思います。なるべくそのラインから離れたところに生きられる仕組みがあればいいなと思います。

事件に遭い「施設から地域生活へ」に希望感じる

宮西 最近見た映画「道草」のなかで、相模原事件に遭った重症の知的障がいの親子が出ていて、親が「この事件で気がついた。これまでちゃんと向き合ってきたんだろうか」と話していました。その親がその子を地域で生活させたくて、自立支援センターに相談に行きます。明るい希望だなと思いました。彼の地域生活が実現するとすごくいいな、そういう社会であってほしいと思います。

徳田 最後に川野陽子さん、こういうシンポジウムを企画して実行委員長として取り組んできた感想も含めてお話をお願いします。

みんなが暮らしやすい社会をつくりたい

川野 責任重大です（笑）。今回、この相模原シンポジウムを中津市で開催するということは、私にとってもすごくたくさんのお話を学ぶ機会になったと思います。私は、中津の行政の方が参加しているなかですが、今から12年くらい前、中津市では障がい当事者が主体となれる活動をしていないし、支援の体制も整わない、中津市はいやだ、別府に行くと言って中津を飛び出した一人です。私と同じような理由で、大分県外や別府に行く、中津を離れる障がい当事者の仲間が数多くいるんですね。

必要なサポートを受けることで自分らしい生活ができるんだということを、日出町でたくさん感じました。活動を通して、いろんな人と会うことで、障がいを持っているからいろんな人とかうやって関わっていくことができるんだと思うことがたくさんありました。

今日は勇気を出していとこの財津浩子さんがパネリストとして参加をしてくれたんです。一番最初に動画で見た杷子ちゃん、とてもかわいかったですよね。あのかわいい杷子ちゃんが生まれた3年前、生まれたよというお知らせが届いたときに、うちの両親はおめでとうと言っていいのかなあと言ったんですね。とてもデリケートなことで、ここで話していい内容が分からないんですが、障がいのある子どもを持つ私の親でさえ、おめでとう、そんなこと言っているのかなあ。大変なのに、という風に言っ

ていたんですね。

両親はどちらかというと後期高齢者ですね。年をとっているけど、なるべく家族だけで頑張っていこうという思いが強い方ではあったんですが、うちの祖母が私が小さいときから「おまえは体は動かさないけど、頭を使って、いろんな人と出会って、いろんな力を身につけていけばいい」と言ってくれたんですね。社会的モデルで、私を支えてくれたと本当に感謝をしているんですが、障がいのある人が地域のなかで社会の一員としてのいのちを授かった時にも、「おめでとう」と言ってもらえるようなそんな地域を皆さんとつくっていききたいなということを、今回のシンポジウムを企画していろんな施設やいろんなところにご挨拶をするなかで、強く感じました。

今回のシンポジウムでつながった宇佐、中津、日田などのすばらしいメンバーの皆さんとは、今後もみんなが暮らしやすい地域をつくっていければと願っています。

本当にすばらしいシンポジウムを中津市で開催させていただいたことに感謝しています。ありがとうございました。

生きていること自体が尊重される時代を開く

徳田 ありがとうございました。これでパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。最後に寄村さんからシンポジウムの総括をしていただきますが、その前に私から一言お話ししたいと思います。

私は、「いのちの選別」という考え方とどうたたかうか。役に立つとか立たないとか、迷惑をかけるとかかけないとか、そういうようなことではなくて、「生きていることそれ自体、いのちそのものに価値がある」ということを誰もが認める社会をつくる時期に来たんだと考えています。この事件をはじめとして、今私たちは新しい時代を切り開いていく、そういう時代に来ているんだと思っています。言葉としてきれいに言うと思われるかも知れませんが、本当に生きていること自体、いのちそれ自体が尊重される時代をつくる、そういう時代に今私たちは生きているということを今日参加した皆さんと確認して、そういう時代をつくるために一人ひとりが置かれたところで自分はどんなことをやっていかないといけないのか、そうしたことを考えていくきっかけになればありがたいなと思います。

パネリストの皆さんありがとうございました。会場の皆さんありがとうございました。

まとめのあいさつ

分断に左右されず大事なものを一緒に求めよう

歩みの会 寄村仁子

本当に長い時間、お疲れだったと思います。パネラーの方々のお話をまとめるのは荷が重すぎますから、私の思いを語るということにしたいと思います。

私は明日で76歳になります。よくもここまで生きて来れたと思っています。30になるかならない頃まで、死にたいと思って毎日を過ごしてきました。ですが、いろんな巡り合わせで障がいのあるお子さんとか、お母さんたちとかに会ったことが大きかったと思うのですが、そこから45年、よくぞ生きてきたと思えるなかに、ものも言えないような、今でもおっしゃいませんが、彼らと一緒にいること、ずっと過ごしてきたこと、仲間、集団というか群れというか、そういうきちんとした形にはならないけれど、いろんなことを一緒にやる、そのため彼らと言葉もなくやりとりをする。できるんですよ。言葉はなくても。顔を見てたり、触れたり、本当に一緒にいることで伝わってきたり、あったことを知らせてもらえたり、そういう仲間とのつながり。お互いに求め合うというか、やりとりをする、そういう世界というのは本当に豊かなんですね。何もする元気がなくても一緒にいながらそこで暮らしていける。そういう意味で言うならシステムというか、社会福祉法人なんて本当に窮屈で1日も早く辞めたいと思ってましたけど、でもそこで守られる暮らしとかもあるんですね。そこが、一人ひとりがちゃんと息をつきながら、自分の名前呼び合える関係、私が一番めざしてきたというか、忘れないでいたかったのは名前を呼び合えること。障がいではなくて、そういう関係のなかで、何を思っているのかなあとか、これでいいのかなあとか、そういうことを思い合いながら来た。そのことがここまで来れた最大の力だったと思います。

先ほどの話のなかのいのちの選別、つまり優生思想と言いますか、そういうものと私が無縁だったわけではなくて、今だって成績をたてにいろんな能力があるとかないとか、優先してしまう人間の見方とか、そういうことに私は左右されていないことはないのですが、彼らと一緒にいるなかであなたそれでいいの、今言ったことはそれでよかったのって、言葉に出さなくても一人ひとりの関係のなかでそういうことがあるわけです。一緒に生きていこうねと、実は45年前に歩みの会を始めたときに、無謀にも「ずっと一緒に生きていこうね、支え合って」と言ってしまったんですね。その頃いろいろ、山あり谷ありで、目の前に起きてくることも予測できませんでした。これでよかったのかという問題もありましたけど、その時間を過ごして来れたんですね。

時には厳しく突きつけられるという関係でもあったわけですが、でも彼らが一緒にいてくれたおかげで私はここまで無事にきちんと生きて来れたなあと本当に思います。

これは言葉で伝えられるというものではなくて、やってみないと、ずっと長いこと一緒にいると伝わってくるもの、伝え合えるもの、これは社会のなかで分断されてしまうと、実現できなくなる。その豊かさなんてことは分からなくなる。日本は今、めちゃくちゃ、分断、分断、分断、最大の分断は、お金の力だろうと思うのですが、そういうものに左右されない、一番大事なもの、生きていくのに助けになりそうなことというのは、自分の足もとを見ながら、周りの人と一緒に求め合っていく、そういう関係をこれからつくり出していけたらいいかなあと本当に思います。

ありがとうございました。

ネット配信への感想

私たちがいることで優しい町に

吉田真知子さん

私は介護保険と障害福祉サービスを利用しながら一人暮らしを続けています。それでもやっぱり、これからもずっと一人暮らしを続けて行きたいです。どんなに障害があっても人の役に立ちたい！私たちが生きていて優しい町になって欲しいと思っています。

相模原事件、私はやっぱりおかしな事件だと思います。犯人が役に立ちたい！と思うのなら、もっと違ったことをして、本当の意味で役に立つようなことをして欲しいです。

二度と繰り返さないように、これからも続けよう

吉田春美さん

相模原障害者施設殺傷事件は、2016年7月26日未明に起きました。神奈川県立の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」に、元施設職員の男Aが侵入し、所持していた刃物で入所者19人を刺殺し、入所者・職員計26人に重軽傷を負わせた大量殺人事件です。あれから3年が経過しようとしていますが、マスコミは沈黙をし続けています。数少ない報道の中で犯人Aは、声掛けをして意思疎通できた障害者は殺さなかったといっています。でも、僕とだったら、意思疎通出来たでしょうか。文字盤で意思疎通可能なことも気づかないまま、僕は殺されていたと思います。また、犯人Aは、優生思想に洗脳されて、必要な人と必要でない人の区別をしていたと聞きます。人間として生まれてきて、必要ない人は一人もいません。動物や植物も含めて、地球上に生まれた命には、それぞれの価値があります。大切な命です。

最近になって、優生保護法の過ちを政府がようやく認めて、救済策の法律も出来ました。そして、家族への補償を求める裁判でも熊本地裁で勝訴して、政府は控訴を残念しました。

優生保護法に関係なく、犯人Aの犯した、尊い命を奪った行為は決して許されるものではありませんが、来年1月から始まる裁判で、犯行に至る考えを素直に話して欲しいと思います。そして、私たちは、二度と相模原事件のような悲惨な殺人事件が起きないように、どんなに障害があっても、生きる喜び、幸せになれることを求める世論づくりのフォーラムを大分県各地で開催したいと思います。以上。人工呼吸器で在宅生活16年目の吉田春美です。

ネット中継を最後まで見ました。とても良かったです。会場からの声を聴く時間がなくて残念に思いましたが、これからも続けていきましょう。お疲れ様でした。

私たちが抜きに、私たちのことは決めないで！一休日の外出、外泊について

大林正孝さん

私は患者である前に、自己決定できる「個人」であり、いつ、どこに行こうと他人は規制できないと思います。漫然と「安全性を十分に確保できない」からの病院側の都合によるものであれば権利侵害と思っています。今後とも頑張つて「他の者との平等を基礎として」に一歩でも近づけるため、事例を積み上げていきたいと思っています。「私たちが抜きに、私たちのことは決めないで！」とのみんなの願いが実現するようがんばります。

参加者アンケートへの回答から

1. 今日、お聞きいただいたお話についてご感想をお書きください。

○パネルディスカッションについて

- ・パネリスト一人一人のお話を伺うことができ、ほんとうに良かったです。様々な立場のお話を伺うことで様々な角度から事件を捉えることができ、今までより深く考えることが出来ました。
- ・組織的な話でなく、当事者本人の方々のお話を聞いて本当に良かったと思いました。
- ・この会議に参加して、色々な経験をされている方々の話、意見が聞いて良かったです。
- ・財津さんの話で、子どもが生まれて、これからいろいろな面で大変と言われましたが。環境がお母さんの助けとなれるよう体力面、財政面でサポートしてくれようになれば良いですね。
- ・発言者みなさんのお言葉、どれも心に残りました。特に中津の人間として短大のことも含め、川野さんのお話を聞いて良かったです。
- ・いろいろな立場のパネラーの意見にすごく現実味と重なってとても学びになりました。

○その他、考えや意見等

- ・障がいの集い等には多く参加したことはあります。今回の重度障がいの参加は初めてです。
- ・考えさせられます。なぜ地域で暮らせないのか、どうしたら暮らせるのか考慮していかなくてはと思います。
- ・いろいろ考える機会になって良かったです。
- ・深く考えることができました。狭い世界の中で生きていくと、自分の考え方が固執してしまうと感じました。様々な立場の人がいて、いろいろな考えが語られる、受けいれられる社会になることを願い、自分のできることに、取り組んでいきたいと思います。
- ・共に地域で生きていきたいと思います。
- ・差別とは人間がつくるものだということを感じました。できるだけ差別意識のない自分になれるよう努力したいと思います。
- ・良かった。
- ・重度の障がい、いろんなハンディを持っている方々が、地域で生きていく上で大切なこと、対岸の出来事ではなく、誰もが当事者となりうる事を認識する必要もある、交通事故、高齢化による認知症、貧困による格差、弱者となり得るこの社会の非寛容性を少しずつ変える必要があると思います。
- ・障害を持つ方が、地域の中で生きて行くために、社会が担う役割や果たす果たす責任について考えるきっかけになるとと思います。

2. 相模原事件について思うことなどをお書きください。

・この事件が起こった当初は怒りしかありませんでしたが、最近いくつかの課題を考えるようになりました。

①なぜ彼のような人間ができあがったのか(いい方は悪いですが)受けた教育や社会の背景に何があったのか

②障がいを持つ子ども達がある時からなぜ地域から消えてしまうのか(支援学校や入所)インクルーシブ教育はどうなっているのか？

③施設・教員も人がいなく孤立していき、虐待や常々の彼らをつくる原因はまだあるのでは…これらを解決するものを考える必要があるのでは。

・あまりにも衝撃的でした。しかし、徐々に目に触れる機会が減り、現状を知らないというのが今でした。やはり対岸の火事という意識が少なからずあったと認識しました。風化させず、自分たちの事という意識を持ち続けたいと、今日思いました。

・これからもこの事件について、話して行くことの必要性を感じました。地域で何でも話せることの大切さを感じます。

・障がい施設で職員として多くの障がい者と接していると(ぐち)等出るかと思うが、その考えを実行するかは良く分からない。

・やはり1人の人間、肯定されることを求め、道が違ってしまった…これもやはり社会の作り出した負の現実だったと考えさせられました。

・忘れてはいけないことですね。

・亡くなった人を想うと生きたかっただろうなと思います。又、家族の悲しみを思うとなんとも言いようがありません。こんなことが二度とおきないこと、起こさせない社会づくりが出来るといいと思います。

・この事件が与えられた影響は何だろうと考えたくなりました。

・もう二度と起こってほしくない！

・これからも関心を寄せ考え続けていきたいと思います。自分の中の弱い考え、差別感、あるいは人間らしい考え方等、あぶり出しの本等に気が付かされる事もあり、皆さんと一緒に考え共有していきたいです。

・ネットでは、犯人と同じような「優生思想」にあふれて、広い社会でのたった一回の事件とはとても思えません。今回のような素晴らしい話を多くの人に共感いただき再発など絶対のない社会にしたいです。

・なぜ職員だった方が？障がいのある方の話を本当に聞こう、何を話しているのか？と知りたいと努力したのだろうか？何があったのか分からないですが、人を殺すという事は、理解できません。もう、こんな事件起きないで願いますので、どうしたら良いかと考えて、話し合うことは大切だと思います。

- ・犯人に対して、もっと精神面のサポートがあればこのような結果にはならなかった。そして、子どもの時から障がい者とともに育っていればこのような思いにはならなかったと思います。
- ・優生思想、どうすればこのだれもが持っている意識を乗り越えられるのか？犯人に限らずすべての人々が大なり小なり同じ意識をもっているのではと気が付いた。
- ・私自身は、決して許すことのできない事件です。一方で、人間社会の中で、障害のある方との共生社会の実現と反対にある、社会の真理の一面がこうした形で現れたように思えます。

3. 重度障がいのある人と共に地域で生きていくことには、今後どのような取り組みが必要か、また今回のシンポジウムに対するご意見、ご感想をお書きください。

- ・本当に日本は憲法に則った人権対策をしてほしいです。
- ・家族の方が地域の方に何を求めているのか知りたい。
- ・重度の方が中津から出ていく、そんなことのない市になって欲しい。知的障がいの人が地域で生きていくことは同じように難しいです。どう支えていくのか一緒に考えてほしいです。
- ・重度の障がいがある人とヘルパーの関係が支援する人、される人、仕事を通じた関係を越える部分があることに興味を持ちました。
- ・私もヘルパーをしています。とてもやりがいのある仕事です、お互いに知恵を出し合い問題を解決できた時、達成感もあります。ヘルパーだって利用者さんに助けてもらうことだってあるんです。誰もがどこかで助けてもらっているんです。利用者さんとヘルパーの2人で出来ないことが起きたら地域の方、医療関係者に助けてもらえる社会になるように困ったことが起きたらその都度、声を出していきたいです。みんなが助け合える温かな優しい社会になるよう願って、出来ることをしていきたいです。
- ・多くの人が障がいのある方との繋がりのある社会にしていけるべきです。そのために、まず障がい児をもっと普通学級で、一緒に学べる教育現場になってほしいです。
- ・ボランティアの考え方、多くの人が地域で生活を支え合う理解し合う土壌を子どもの頃から養っていく必要があると思います。健常者ばかりのクラス、学校、社会で成り立つのではなく、多様な人々、人種や性差、障がいを含む弾力ある社会や地域の中から、理解や仕事としての福祉の専門性も育っていくのでは、色々考えさせられました。
- ・インクルーシブ教育ができることで偏見のない社会が生まれてくるのでは。今の政治が変わって社会保障を削るような社会がなくなればもっと住みやすい国になる。
- ・当事者と一緒にたくさん発信していきたい。地域で生きていくことで支援者も増えるし、みんなが生きやすい社会になる。

- ・今回のようなシンポジウムは続けていくべきです、他人を尊重する、正しく理解を伝えていかないとネット社会などの誤った情報が拡散してしまうと思う。
- ・貴重な時間をいただき、ありがとうございました。「地域で介護する」という意識を色々な人にもっと知ってもらいたいと思いました。今後も同様の取り組みが続いてほしいです。
- ・ありがとうございました。
- ・自分にできることを考えて行きます。とてもとても深いみなさん(シンポジウムパネラーさん)の思いや言葉をいただきました。言葉ではまとめられない思いで、今はいっぱいです。本当にありがとうございました。
- ・今回のように障がいを持つ当事者の声を聞く場は必要である。
- ・とても充実した有意義な時間を共有できました。ありがとうございました。
- ・豊前でもお願いします。
- ・企画してくださってありがとうございます。何もお手伝いできませんでしたが、また参加したいと思います。
- ・私の叔母もダウン症の障害者でした。幼い頃は、叔母と自分の違いが理解できず、どう接してよいか分かりませんでした。私の父は、その叔母をひどく嫌っていました。その影響からか、いつしか私もその叔母を軽んじたり遠ざけるようになりました。今思えば、父の感情は、身内であるがゆえの歯がゆさや葛藤があったのだらうと思います。私は大学進学後、私がずっと内側に抱いていた叔母への一種の嫌悪感ともいうべき感情の正体を知りたいと、重度の心身障害児と関わるボランティア活動に携わるようになりました。当初、父は私のそうした障害を持つ子どもに関わる活動に猛反対でした。実家に帰り、活動の理由を説明し、説得しました。後日、父から「紫のノート」という本が送られてきて、「自分で決めたことなら、頑張りなさい。」と一枚の手書きのメモが付けられていました。今日のシンポジウムの意義は十分に理解できますし、とても大切なことです。こうした取り組みを継続することが、社会の意識を変革し、障害を持つ方が地域社会の中で暮らしていける一歩に繋がることだと思います。今日のテーマ、パネルディスカッションのメンバーの方々の想いは、非常に重厚なものでした。そのこと自体はとても大切なことですが、今日の参加者あるいはネット配信の視聴者が、これまで障害を持つ方との接点が一度もない人だった場合、どれほどみなさんの言葉が届いただろうか。。。という思いも抱きました。求める社会の実現には、私たち一人ひとりがその当事者であるという意識を持たなければなりません。そのためには、それぞれのステージに応じた地道な取り組みが必要だということを改めて胸に刻みました。皆さんの活動を心から応援しています。

あとがき

このシンポジウムが、中津で開催されることが決まった時、過去2回、大分市で開催され、とても深く、丁寧にこの事件の問題と向き合っていたこと、そして今回は「地域で共に生きていく事」がメインテーマということで、どのような切り口で内容を創り上げていくか、どれくらいの方にご協力を頂けるか、少々不安を抱きながらのスタートとなりました。

しかし、この相模原事件を風化させてはいけない、この問題は障がい者だけの問題ではなく社会の問題、地域のみならず考えていかなければいけないと、趣旨に賛同する福祉団体、障がい当事者、家族、支援者、医療従事者、行政の方々が集まってくださり、半年近くにわたり準備を重ねてきました。

「中津では車椅子の人を見ない」、知的障がいのあるお子さんを持つ親御さんからも「親がいなくなったあと施設しか選択肢はないのか、地域の中で暮らしていくための支援の受け皿が欲しい」といった声をよく聞きます。障がいのある人をもつ家族は、自分の時間を犠牲にしなが、家族だけで問題を抱え込み、生活を支えなければいけない、側にいるのは常に家族といったイメージが強く、私がヘルパーと外出しているときにも「お母さん、大変ですね」という言葉をよくかけられます。

国は、障がい者の地域移行を進め、一進一退を繰り返しながら、少しずつではありますが、障がいのある人の生活の質も高まり、人生の選択肢も昔よりは広がったように思います。しかし、重度障がいのある人が地域の中で公的な制度を利用しながら生活を送りたいと思っても、支援する側のスタッフの数が不足、思うような支援が出来ない現状、そして慢性的な人材不足の状況が長く続き、どの福祉現場も強い理念で、毎日を乗りきり、障がいのある人の生活を支えているのです。そんな福祉の現場で働く職員は、とても重要な仕事をしているということを社会全体が認識し、支える側の保証、制度そのものの見直しをしていかなければ、私たち障がい者の地域生活はどんどん厳しい状況になっていくことでしょう。

では、制度さえ充実すれば、障がい者の生活は成り立つのか？というと、決してそうではなく、地域の中で一人でも多くの人と繋がり合うことこそが、「人として豊かに生きる」ということになると考えています。

今回のシンポジウムでは、相模原事件を振り返りながら、障がい当事者、家族、支援者、それぞれの立場から思いを発言して頂きました。それぞれの言葉に重みがあり、社会の中で感じる「生きづらさ」を「共に生きる力」へと変換するキーワードが沢山込められたものばかりでした。こうした取り組みの積み重ねで、地域の様々な人の声を聴き合うことこそ「共に地域を作り、共に地域で生きる」ことにつながることを信じています。

またシンポジウム当日に、会場まで来ることが難しい方々にも是非参加してもらいたく、ネットの生配信を有限会社ユニットの工藤さん、そのお友達の佐藤さんがボランティアでご協力頂き、世界中に私たちの思いを届けて下さいました。当日まで何度もリハーサルをしてくださったこと、本当にありがとうございました。そして、シンポジウム開催まであらゆる形でご協力して頂いた全ての皆様、この冊子の作成に助成をいただきました大分県地方自治研究センターに心より感謝申し上げます。

相模原事件を風化させないこと、この事件がもたらした深い傷、様々な課題と、私たちはこれからも怯むことなく、向き合い続け、一人一人が尊く、生きている喜びや、楽しさ、素晴らしさを共有できる社会を、障がいの有無に関わらず、共に築いていくことを胸に誓い、あとがきとさせていただきます。

2019年9月吉日

相模原事件を考えるシンポジウム 県北実行委員会

川野 陽子

第3回相模原事件を考えるシンポジウム「重度障がいのある人と共に地域で生きていくという事」の当日の様子を、動画でご覧頂けます。



《URL》

<https://www.youtube.com/watch?v=iEDwcOFXnq8&fbclid=Iw>

第3回相模原事件を考えるシンポジウム
**重度障がいのある人と
共に地域で生きていくという事**

日時 2019年
7月20日(土)
午後1時30分～4時まで
(受付/13:00～)

場所 中津市教育福祉センター
多目的ホール
中津市沖代町1丁目1-11
TEL 0979-24-1294

参加費 無料(申込み不要)

手話通訳、要約筆記を手配しております



日田市在住 ハコちゃん(3才)

2016年7月に神奈川県知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で起きた「相模原事件」では、施設職員より19人もの尊い命が奪われるなど、日本社会に大きな衝撃を与えました。

この事件を受け、シンポジウムを3回に渡り開催しました。しかし、答はませんでした。

「相模原事件」は決して許されるものではなく、根深く残っている差別、優生思想、障がいを持って生きること、命の大切さなど、あらゆる視点で取り組んでいかなければならない問題を私たちに投げかけています。

あれから3年。そこで、多一度、相模原事件と向き合い、障がいのある人が、社会や地域の中で自分らしく生きていくには、どのような課題があり、これから何をしていけばよいのかを地域の方々と一緒に考えていきます。

《基調報告》

廣野俊輔(大分大学)
「事件の概要、そして3年経った今…」

《シンポジウム》

コーディネーター/弁護士 徳田靖之氏
財津浩子氏(障がい児の子育てをずる家族)
川野陽子氏(障がい当事者)
宮西君代氏(障がい当事者)
村田憲一氏(支援者)



《フロアからの発言》

《まとめ》 香村仁子氏(歩みの会)

主催 / 「相模原事件を考えるシンポジウム」県北実行委員会 後援 / 中津市 中津市社会福祉協議会 中津市議会
問い合わせ先 / 事務局 社会福祉法人こころの樹(担当 小野) TEL 0978-32-0631

2019年9月

発行 「相模原事件を考えるシンポジウム」県北実行委員会
だれもが安心して暮らせる大分県をつくる会

連絡先 社会福祉法人こころの樹

宇佐市大字下敷田448-2 TEL0978-32-0631

だれもが安心して暮らせる大分県をつくる会

大分市都町2丁目7-4-303 在宅障害者支援ネットワーク気付

TEL 097-513-2313